

## 樺太犬「ジロー」の剖検所見

雨宮 淳三\*

### PATHOLOGICAL OBSERVATION ON SAKHALIN-TYPE DOG "JIRO"

Junzo AMEMIYA\*

#### *Abstract*

A Sakhalin-type dog named "JIRO" was one of the two dogs that survived for a year (Feb. 1958-Jan. 1959) without any help of man. He died at Syowa Base in July 1960. As a result of the pathological observation on this "JIRO", the following changes have been noticed.

The macroscopic changes are:

1) splenic and hepatic atrophy, 2) gastric dilatation caused by hair balls (tricho-bzoar) and 3) enlargement of kidney that is considered as swelling.

The microscopic examination of this sample has failed to get any noticeable results, as the sample was damaged due to post-mortem change and poor storage.

#### 序

第1次南極地域観測隊とともに昭和基地に行き、そのまま南極地域にあり、昭和35年(1960)7月8日死亡した樺太犬「ジロー」の内臓の病理解剖を行ない、病因を検索してみたので、その大要について記す。

ジローはタロー(第5次隊の手で昭和36年(1961)5月連れ帰り、現在北大博物館で飼育中)とともに1958年2月~1959年1月までの間、昭和基地付近にあって越冬隊不成立のため犬のみで生存し、その後第3次、第4次越冬隊の手で飼育されたものである。

なお検体は死後屍体はそのまま基地付近の雪中に埋葬されてあったものを、1961年1月第4次越冬隊の景山孝正隊員の手で解体され、ガソリンかんにホルマリン結にしてあるものを筆者が受取り、帰還後調査したものである。また、骨骸、皮は北大博物館に保存された。

#### 病理解剖所見

##### 肉眼的所見

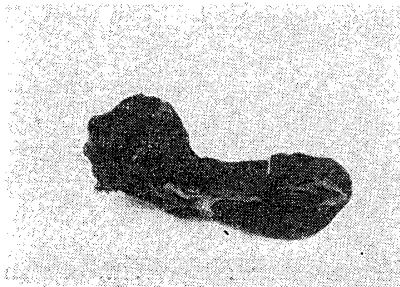
検体は心臓、脾臓、肺臓、胃、肝臓、腎臓の諸臓器のみであり、多分死後の処置及び輸送条件によるものと思われるが一般に黒褐色を呈していた。

\* 鹿児島大学農学部、第5次南極地域観測隊員。 Faculty of Agriculture, Kagoshima University, Member of the Japanese Antarctic Research Expedition, 1960-61.

各臓器について簡単に記すと、

心臓 385g

左右両心室に血液の滯溜が認められた。血液は黒褐色，結晶状を呈し，外見は砂粒状であった。これは検体が死後及び輸送中低温にあったことによるものと思われる。



第 1 図 脾臓  
Fig. 1. Spleen.

その他に異状は認められなかった。

脾臓 36g 排水容量 26cc 長径 15cm

短径最大——最小 4.5~2.5cm 厚さ 1~1.5cm

脾臓は被膜皺襞形成を見，著明な萎縮が認められた。剖面の変状は不明。

肺臓 735gm

黒褐色を呈し，辺縁に気腫が認められる。剖面の変状は

不明である。

肝臓 875g

黒褐色を呈し，やや萎縮の感があるも剖面また不明である。

腎臓 左 140g 右 135g (左右ほぼ同形) 長径 9cm 短径 5cm

厚さ 4cm

黒色を呈し，腎臓自体が各臓器及び推定体重に比し著しく大形である。

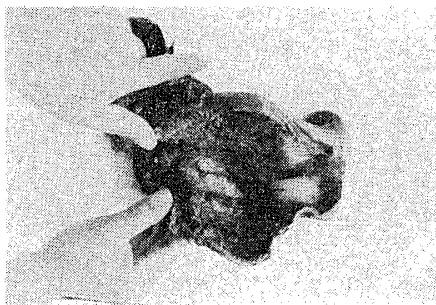
胃 容量 約 170cc

幽門腺部粘膜は肥厚腫脹し，幽門部内に毛塊を認めた（毛がたばになり巻き毛塊になり，その数大小 7 個，その全排水量 45cc）。その毛塊間に海草（長さ約 8cm に切れているわかめの中椎 7 個）がからみ，その他未消化の落花生数個，小肉片 2 個，ねぎ数片が残留する。

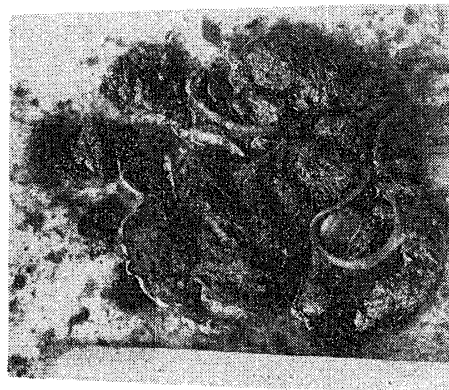
胃噴門部は拡張，粘膜は菲薄である。

### 組織学的所見

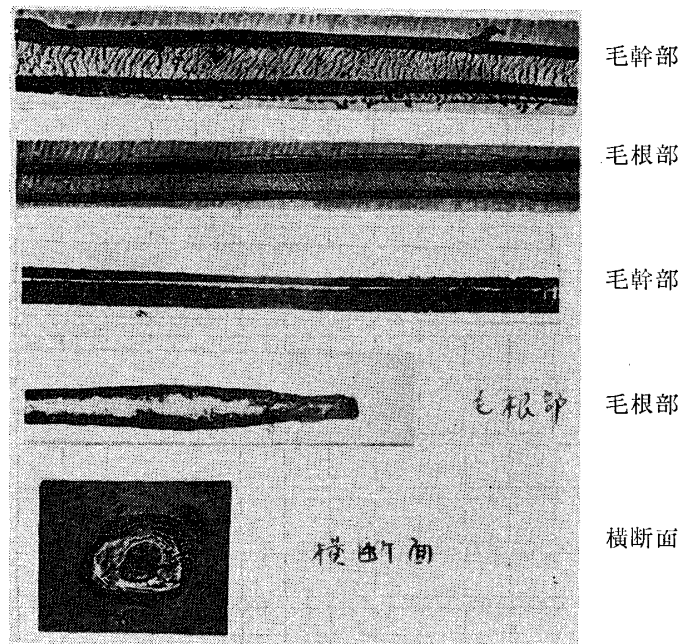
各臓器の組織標本を作成したが，満足に見えるものは結合組織で，他の部分は死後変化が著



第 2 図 胃  
Fig. 2. Stomach.



第 3 図 胃内容物  
Fig. 3. Contents of Stomach,



第4図 胃より検出された毛の顕微鏡写真(一例)

Fig. 4. Fur detected in the stomach.

しく、組織の性質が不明となり、組織を検討することができなかった。死後変化は自家消化及び長期低温保置によるものと思われる、暖地における細菌性腐敗は殆んど起こっていないようである。

胃の中に存在していた毛髪は長毛(11cm内外)が多く、他に短毛(2~4cm)もあったが全部外見上同質のもののようにであった。色は大半黒色か黒褐色、なかに薄褐色、白色のみられた。その中より任意にとった12本について脱色試験、顕微鏡検査(髄質、毛上皮、髄細胞等)等を行なった結果、髄指数40~67で全部獣毛で、その内9本は犬の毛と充分決定し得る所見を得た。他3本の毛上皮の形状は他の動物(いたち、たぬき、きつね)のそれに近いが、横断面の形状、色調、太さ、髄指数等よりそれらの獣毛ではなく、犬のものと推定される。

なお、あざらし、ペンギンの毛と比較検討したが、それらしき毛はふくまれていなかった。

## 考 察

検体が新鮮でなく、くずれているため充分な検索をなすことができなかったが、肉眼的病理解剖所見の中顕著なものは、脾臓の萎縮、腎の腫大、胃の拡張である。

脾臓の萎縮は他の臓器のすべてに萎縮があるわけではないが、老衰によるものでなく(死亡は生後4年6ヶ月)、多分一時削耗の状態にあったうたがいがもたれる。

腎が大型であることは、恐らく腫大を意味していると思われるが、その原因は変性または腎炎のためとも考えられないことはない。

胃の拡張は明瞭で、毛塊の胃内蓄積によってひきおこされたものと思われる。犬の場合、胃

の内容に異物があることは珍しいことではないが、このような多量の毛塊の存在は消化作用をさまたげていたものとみられる。

毛は有根毛が多く抜去毛の形態を示し、異嗜によるものと思われる。

とにかくこれら所見が死因の重要な要素を構成したものと推定される。

**附記** 剖検にあたり鹿児島大学農学部新美大四郎教授、また毛髪<sup>の</sup>鑑定に鹿児島県警察本部大迫技師の御協力をいただいた。

(1961年8月23日受理)